

巻 頭 言

新米室長のおそれ

富山大学放射性同位元素総合実験室

室長 黒 田 英 世

今我が国では信じられないようなミスと、それに対するなんとも稚拙な事後処理によるトラブルが頻発しています。大きな問題では、金融機関や各種団体の不良債権問題もありましょう。JCOの事故、いやあえて事件といひましょう、これもそのたぐいの問題でしょう。雪印乳業事件もそうでしょう。一方、ミスに起因するトラブルではありませんが、降りかかる火の粉を果敢な事後措置で処理し、“株”をあげた目薬製造会社もありました。このようなとき、トップの責任は大変重いと痛感いたします。

私は本年4月に菅井道三先生の後を受け、表記の施設の室長をお引き受けいたしました。内心はいやいや、びくびく。なんせ、この小さな実験室は昭和39～40年に建設され、老朽化著しく、立入検査の科学技術庁の係官をして『我が国のこの種の施設ではワーストスリーに入る』と、太鼓判を押された施設です。ただし、粗末な設備ですが、あまり危険な核種は扱わず、使用する線量もごく制限しており、万一の場合でも一般学生や付近住民に危険を及ぼすようなことはあり得ないと信じています。しかし、取り扱っている研究者・学生に障害を与える可能性は否定できませんし、ご近所さんに不安を与えることもあり得ましょう。実験者のミスもあり得ますし、地震や火事の可能性もあります。このようなとき、有効な事後措置はどう取ったらよいのか、しかも迅速に行うにはどうしたらよいのか、無い知恵を懸命に絞っています。

第一にミスによる事故はなんとしても避けたいところです。しかし、取り扱っている学生諸君の、科学的どころか常識的な知識や洞察力にも不安を覚えることがあります。とてもJCOの職員を非難できません。しかし、愚痴をいっていてもしょうがありません。これに対処するには、訓練と基礎的な教育しかあり得ないでしょう。現状を考えると道まだ遠しと痛感いたしますが、やるっきゃないでしょう。なんとかして、できる限り。

ミスが起こった場合、避けえない地震や火事などが起こったとき、どうしようかと考え込んでいます。まずは事が起こったとき、とにかくRIの流出・飛散を防ぐ設備だけは、考え得る最善のものを要求していかなければと考えます。もちろん我が施設、ぼろ屋ですがこの点に関しては、従来の関係者がずいぶん努力をしてこられたと感じますが、まだまだ改善の余地が多々あります。

さらに事がいったん起こった場合、どうするかということを具体的に考えておく必要を痛感いたします。もちろん当室にも事故の場合の連絡体制の策定等はできています。しかし、いろいろな場合を想定して、そのとき誰が、どう動くかということまでは、考え抜いていません。いざというときおたおたしないよう、いろいろ想定していますが、これも全学的に種々の事態を考えておかねばならないと思います。

最後に事が起こったときその情報を、いかなるタイミングで、いかに正確に理解してもらえるように伝えるか、これも種々の場合を想定していかなければと思っています。情報操作の要諦は、“隠すこと、漏らすこと、そして脅すこと”だと言われてきました。しかし、問題を起こした各社・各団体は、むしろ“隠せず、漏らされ、脅され”た所が多いようです。情報を操作しようなどとは、夢思ふべからずだと痛感いたします。

このようなことは、皆さんの施設ではすでに熟考されているとは思いますが、しかし、一度このような問題を大勢で議論し合うことも無駄ではないと思います。少なくとも私には大変参考になりそうです。また、危機管理の専門家の話を聞いてみたいと思っています。